ヨハネによる福音書(第 20 章 19～31 節)

　マグダラのマリアから主イエスがご復活なさったことを聞いた弟子たちは、自分たちのいる家のすべての鍵をかけてこもってしまいます。ユダヤ人から攻撃される恐怖、そして、主イエスを裏切ってしまった、ということによる恐怖に囚われていたからです。あれだけ愛してくださった師匠を裏切ってしまった。そして、その師匠は裏切りの果に、殺されてしまった。死んでしまったら償いようがない。弟子たちは、この途方もない後悔、恐怖の渦の中におぼれ、呼吸すらできないほどに苦しんでいたに違いありません。恐怖や後悔に支配された彼らは、子供が夜、暗闇の恐怖を布団に潜り込んで何とかやり過ごそうとするように、部屋の鍵という鍵を締め、さらには自分たちの心をも閉ざして何とかその恐怖から逃れよう、身を守ろうとしていたのです。

　しかしその彼らの真ん中に、主イエスは来てくださいました。「あなたがたに平和があるように。」すべての恐怖が吹き飛んだに違いありません。復活とはなんという恵みでしょうか。どうにもならない後悔、悔み、「死」をも超えて、新たに生きる命をくださる。どうにもならない恐怖の闇の中にまで、復活の主イエスは来てくださる。そして、主イエスは弟子たちに息を吹きかけます。これは、創世記で神が人を創造された時、命を吹き込んだあの息吹です。すべての人をその汚れから清める霊による息吹です。弟子たちの恐怖はこの息吹によって吹き飛ばされました。この神の息吹によって、彼らは今や赦され、新たに創造され、神の赦しをこの世に宣言するために遣わされる新たな命を与えられたのです。